

氏名（本籍）	樋口 鉄平（山口県）			
学位の種類	博士（音楽）			
学位記番号	甲第15号			
学位授与年月日	令和3年3月19日			
学位授与の要件	学位規則第3条第3項			
学位論文題目	アペルギスの《レシタシオン》における余剰による不確定性			
学位論文等審査委員				
（総合審査）	委員長	准教授	三浦 雅展	
		教授	今村 央子	
		教授	菊池 幸夫	
		教授	近藤 伸子	
		教授	佐竹 由美	
		教授	吉成 順	
（演奏審査）	委員長	准教授	三浦 雅展	
		教授	今村 央子	
		教授	菊池 幸夫	
		特任教授	森垣 桂一	
			鈴木 治行（作曲家）	
（論文審査）	委員長	教授	三浦 雅展	
		教授	近藤 伸子	
		教授	佐竹 由美	
		教授	吉成 順	
			椎名 亮輔（同志社女子大学学芸学部音楽学科教授）	

審査結果の要旨

審査所見

この研究の目的はギリシアに生まれフランスで活動を続ける作曲家ジョルジュ・アペルギスが1977年から1978年に作曲した声のソロのための《レシタシオン》について、「余剰による不確定性」という概念によって分析し、作品の位置付けを検証することである。申請者によると「余剰」とは楽譜に埋め込まれた情報の過多のことであり、特にチャールズ・シーガー(1958)の言う「指示的」と「描写的」という2つの書記レベルによる混乱であるとし、それによって「予見しえない状況を引き起こす」ことがあるとしている。このような状態を申請者は「余剰による不確定性」と述べており、この観点から《レシタシオン》を分析している。また、申請者は《レシタシオン》における「余剰による不確定性」の研究成果に基づき、楽譜の在り方を根本から問い直すことを目的とした作品を創作し、その演奏を通して「余剰による不確定性」について実践的に検討している。

修了リサイタルは、2021年2月4日正午より、国立音楽大学講堂小ホールで行なわれ、3つの作品が演奏された。1曲目は《Unnarrative Narration III(2018-2019)》、2曲目は《Der Wegweiser(2019-2020)》、3曲目は《String Quartet in C Major (2020)》であった。ピアノによる作品と弦楽四重奏による作品であり、特に2曲目は弦楽四重奏に併せて申請者自身の講演もなされ、作品に関わる申請者の思想や背景について説明された。審査結果は以下のようなものであ

った。1) 作品はよくできており肯定的な評価であった。哲学の実験室のような感じがした。2) レクチャー形式を含めた作品で、最近の芸術的演奏ができていと感じられた。音だけでは説得は充分ではないように感じられるものの、この作品を通した未来のことを考えると、こういう試みをやろうという評価ができた。3) 純粋な演奏発表として考えた場合、研究テーマについての十分な提示がなされたとは言い難い。ただ、研究論文のテーマに基づいたものであった。作品の作り手が誰にあるのか、ということをお問うていることが興味深かった。申請者自身ではない誰かによる作品制作という点があり、作成者が誰なのかということに問いかけるものでもあった。4) 1曲目は冬の旅であるということ、つまりナラティブの感情が感じられた。3曲目は理想的な協和的「ドミソ」としての全体性の観念に侵食することを主張していたが、ドミソの概念が何かを規定してほしかった。弦楽四重奏を選択したことの説明は特になされていない。リズムの概念がドミソの概念とどのようにかわるのかの説明がなかったものの、全体的に言って今後の活動が楽しみである。

その後、同日の午後2時半より国立音楽大学講堂小ホールにて論文口頭試問が行なわれた。提出された論文は120頁以上にわたって書かれており、全4章から構成されていた。第1章では、《レシタシオン》の概要及びその分析の困難性、先行研究について述べていた。第2章では、アペルギスの連作(肖像の回廊)の楽譜における表記について、不確定性の観点から考察していた。第3章では、《レシタシオン》全14曲の分析を行っており、特に申請者の提案する「余剰による不確定性」という考え方がこの作品に適用可能であることを、「置換」や「擬態」といった修辞学の技法を用いて説明していた。第4章では、「余剰による不確定性」の位置づけをエリックサティの楽譜を用いて説明し、20世紀後半のアメリカとヨーロッパでの傾向について説明していた。論文に対する主な評価は以下の通りであった。1) タイトルの「余剰による不確定性」という言葉について、「余剰」という言葉の一般的な意味から言って適切な使い方とは言い難い。不確定性というのは元来多義性を持つもので、「余剰」を包含している。2) 「指示的」記譜法と「描写的」記譜法という分類概念をアペルギスの作品の分析に使用する上で、概念の拡大解釈があった。作曲家が演奏のために書いた楽譜である以上、アペルギスの楽譜も「描写的」なものとは言えず、どのような形であれ、演奏者に演奏を「指示する」ものであり、説明の追加が必要であった。3) 論文全体としては面白いものの、その「面白さ」をどう評価すべきかが難しかった。一般的な論文として見ると、用語の概念規定があいまいで、その使い方にも揺れが見られ、論理を逸脱することがしばしばある。しかし、この論文はそうした書記行為、言語表現や記譜表現がはらむ曖昧さをテーマにしたものであり、申請者はこの論文でその「不確定性」を積極的に利用した言語表現を実践している。この論文はそうしたものとして捉え直し、論文内の概念規定の曖昧さや用語法の揺れを欠陥ではないと見ると、この論文で申請者の主張したいことはきちんと読者に伝わるように思われる。

このように、論文においては多数の問題点が指摘され、今後の研究課題が示された。論文に対する評価1と2については、用語の説明と詳しい説明が追加的に必要であった。申請者は回答を口述試験において適切に説明しており、その内容を論文に記すことを表明した。さらに論文に対する評価3からわかるように、問題は散見されるものの、研究の方向性としては価値あるものであり、かつ口頭試問にて適切に説明できていたことから解決できると判断できた。

演奏審査の結果と論文審査の結果に基づいて総合審査において審査され、申請者の在学中の活動や日々の学びの状況などに基づいて議論された。その結果、総合審査の結果は合格となった。以上より、樋口鉄平氏の修了リサイタルと博士学位申請論文は、国立音楽大学大学院博士後期課程のディプロマ・ポリシーに照らして、「博士(音楽)」の学位に相応しいと判断した。